

明転

内藤が一人公園のベンチの前で一生懸命ヘッドフォンを聞きながら踊っている
ヘッドフォンからはなんだかノリノリのラテン音楽が

内藤 「シングルシングルダブル！シングルシングルダブル！シングルシングルダブル！
ステップアンドステップ、ステップアンドステップ、ステップアンドステップ」

内藤だいぶ踊ったのか汗だくである

そこにマー君がやって来てしばらく内藤のダンスを見てる

内藤、踊りながら振り返るとそこにマー君が立っていてびっくりする。

内藤 「わっっびっくりした〜！」

マー君 「今日は・・・」

内藤 「どうしたんですか？その顔？」

マー君 「この前追い払った3人組とアンジェリカでばったり出会いましてね？」

内藤 「え？」

マー君 「ボッコボッコにされました！」

内藤 「だいじょうぶですか？」

マー君 「大丈夫です・・・それよりどうしたんですか？なんか鬼気迫るものがありましたけど」

内藤 「ズンバです。」

マー君 「ズンバ？」

内藤 「はい、このズンバをマスターしないといけないんです。」

マー君 「また、例のダイエットDVDですか？」

内藤 「それもあるんですけどね・・・ジャニーズですよ！」

マー君 「あゝ、娘さんの彼氏さんですね・・・」

内藤 「彼氏じゃなくいーあいつはね、うちの娘をたぶらかそうとしてるんですよ！」

マー君 「はい？」

内藤 「あのジャーニーズ野郎がですね、ズンバのアジア大会に出ることになったみたいで
すね、うちの娘と一緒に中国に行こうと誘ったみたいなんですよ。」

マー君 「アジア大会ですか、すごいですねゝ、やっぱりそういう大きな大会ともなると大好き
な人と行きたいという気持ちが働くんでしょうね、一人だと心細いし、一番信頼でき
る人にそばにいて欲しいんでしょうね！」

内藤 「ちよっと〜そんな他人事みたいに言わないでくださいよ！いいですか、娘はまだ未成

年なんですよ！未成年に男と二人で旅行に、しかも海外旅行に行かせる親がいますか？」

マー君 「ええ、そうですね、内藤さんの気持ちも、よくわかりますよ！」

内藤 「ですからね、私が、猛練習してですね、あのタツ君にですね、引導を渡してやるんですよ！」

マー君 「はい？」

内藤 「私がコテンパンにやっつけてやるんですよ、ズンバでね・・・そしてね、お前のレベ
ルはまだまだこんなもんだ、女連れで大会に出るなんて甘っちょろいこと言いやがっ
て、そういう話をもっと精進して、俺に勝つてから言えって言ってやるんですよ・・・
あいつだって私に負けたらあきらめがつくでしょ！」

マー君 「・・・内藤さん・・・」

内藤 「なんですか？」

マー君 「ズンバの大会ってどんなものかご存知ですか？」

内藤 「いや、知りませんが、きっとあれでしょ、ダンスを踊って何か点数で争うでしょ？社
交ダンスみたいな感じで・・・」

マー君 「大勢の人が集まってみんなで楽しく踊るってだけですよ！」

内藤 「なに？」

マー君 「みんなで楽しく踊りましょうというイベントですよ！」

内藤 「は~~~~~？なんですか？それ？」

マー君 「なんすかってもとそういう大会なんでもん・・・そもそもズンバの意味ってわ
かりますか？」

内藤 「ん？ダンスの名前でしょージャズダンスとか、ヒップホップとかの・・・」

マー君 「ズンバはコロンビア語で、どんちゃん騒ぎという意味なんです。」

内藤 「どんちゃん騒ぎ？」

マー君 「そうですね、ただのどんちゃん騒ぎに勝つも負けるもないじゃないですか・・・」

内藤 「・・・じゃーなんですか？あのジャーニース野郎は、ただどんちゃん騒ぎしに娘と中国ま
で行こうとしてるって言うんですか？・・・なんのために??？」

マー君 「いや、なかは解りませんが・・・楽しそうではありますよね・・・」

内藤 「ダメですよーそんなの絶対ダメですよ！ちくしょー今日帰ったら断固反対と言ってやりま
すよ！ほんとにく、ふざけるなって言うんですよ！」

マー君 「お子さんを持つといろいろ心配事もあって大変ですね。」

内藤 「心配といえますかね、今回の場合は妻にも原因があるんですよ！」

マー君 「奥様に??？」

内藤 「はい、妻がですね、そのくたつ君のことをえらく気に入ってましてね・・・女性って
いうのはなんで、イケメンに弱いんですかね???年取ったらただのおじさんになる
ってわかってないんですかね???」

マー君 「いや、それは男性も同じじゃないですか?綺麗な人見るとなんかテンション上がるじ
ゃないですか・・・」

内藤 「マーそうなんですけどね・・・あーところで、その後どうですか?順調ですかヴェロ
ニカさんでしたっけ?」

マー君 「ええ、別れました!」

内藤 「ええ?もうですか?だってあれつい5日ほど前じゃないですか?またどうして・・・」

マー君 「やはり、言葉ですかね?スペイン語は難しすぎですね!」

内藤 「でも、語学留学できてるぐらいなんだから向こうだって少しぐらい日本語話せるでし
よー!」

マー君 「話せると言ってもまだまだですよ!それにですね、情熱的すぎると思いますかね、会
社に行ってもですね、10分に一度電話がかかってきてですね、ベサメムーチョッ
て聞いてくるんですよ・・・もちろんベサメムーチョと答えてるんですけどね」

内藤 「すいません意味がさっぱりわかりません!」

マー君 「超キスして!です。」

内藤 「いいじゃないですか、それだけ愛されてるってことですよ・・・」

マー君 「そうだったんですけどね、毎日毎日10分おきに電話かけられたら仕事にならないじ
ゃないですか?だからですね3日目からは仕事中の電話は出ないことにしたんです
よ!そしたらその日のうちに、なんだかわからないスペイン語の罵倒がものすごい勢
いで留守電に入ってますよね・・・それっきり連絡が取れない状況です・・・」

内藤 「それはまた、厳しいですね!」

マー君 「そうなんですよ!・・・でもですね、それぐらいでダメになるといっつのはですね、最
初から縁がなかったんですよ!」

内藤 「ほく・・・マー君て前向きなんですね・・・」

マー君 「ええ、おかげさまで、新しい彼女ができましたから?」

内藤 「はやっ!もうですか?」

マー君 「はい・・・」

内藤 「なんでそうぼんぼんぼん彼女ができるんですか?」

マー君 「なんでも言われなくてもですね・・・タマタマですよタマタマ!」

内藤 「たまたまでもそんな別れたそばから彼女ができる人なんてそうはいないでしょ!」

マー君 「しょうがないじゃないですか!できちゃうんだから・・・」

内藤 「そうですねか……で、今度は何してる方ですか？」

マー君 「先生です。」

内藤 「先生？」

マー君 「はい、ほら、僕もヴェロニカと話ができるようにと思ってスペイン語スクールに通ったんですよ！でももう必要なくなったから退会しに行っただけですね、そしたら先生が折角入ったのにもったいない！もう少し続けてみませんか？……先生がそこまで行ってくれるならばらく通ってみますということになって……それで親睦会といえますか、飲みに行きましようということになりましてね……」

内藤 「で、付き合つことになった……」

マー君 「いや、まだ正式に付き合つということまでは、行ってないんですけどね……」

内藤 「じゃー彼女じゃないじゃないですか！そんな一度飲みに行っただけで彼女だなんて思ってたなら、あれですよ、あのマリアの二の舞になりますよ！」

マー君 「そんなことはないですよ……だってキスしましたもん。」

内藤 「は……」

マー君 「二人でお酒飲んでたらなんとなくそういう雰囲気になりましたね……」

内藤 「という事は、向こうもマー君に好意があるということですね……」

マー君 「はい、多分そうだと思います……」

内藤 「で、マー君もその先生のことをいいと思ってるんですね？」

マー君 「はい、じゃなかったらキスなんてしませんよ！」

内藤 「普通はそうなんですけどね、その、マー君の場合は惚れっぼいといいますが、すぐ人を好きになってしまっじゃないですか……」

マー君 「今度はマジなんです。なんというか、今までとは違う感じがするんですよー」

内藤 「だったらちゃんと思いを伝えましょう！……いいですか、現時点ではまだその先生とは恋人関係というところまで行ってないと思うんですよ！……このままだと今までみたいに、すぐ終わってしまう気がします。ちなみにその先生は日本の方ですか？」

マー君 「はい、まみ先生です。」

内藤 「まみ先生、うん、名前からして今回はうまくいきそうな普通の名前ですね……」

マー君 「そんな名前で判断しないでくださいよ……」

内藤 「あ、すいません。マー君今回はしっかり彼女のハートを掴みましょう！そのためにはやはりちゃんと告白したほうが良いと思います。」

マー君 「そうですね……しかし僕ですね、今までそういう風にきちんと思いを伝えたことがないので、どういふ風に伝えたらいいのかわからないですよー」

内藤 「そんなのストレートに言ったらいいんですよ！あなたが好きです、僕とお付き合ひし

